

p.1	第 30 回 JASPM 年次大会の開催と発表募集について
p.2	2018 年度第 1 回関東地区例会報告.....梅田 径
p.4	2018 年度第 1 回関西地区例会報告.....粟谷佳司・太田健二・永井純一
p.5	2018 年度第 2 回関東地区例会報告.....周東美材・宇野友子・北村心平・西山颯・石橋鼓太郎
information	
p.7	事務局より

第 30 回 JASPM 年次大会の開催と 発表募集について

【ご挨拶】

大会実行委員長・大和田俊之

JASPM 第 30 回大会は、2018 年 11 月 24 日(土)・25 日(日)に、慶應義塾大学日吉キャンパスで開催されることになりました。

大会のタイムテーブルは、近年の JASPM 大会(昨年度を除く)に倣い、24 日(土)午後個人発表と総会、25 日(日)午前ワークショップ、午後シンポジウムを計画しています。

周知の通り、慶應義塾大学日吉キャンパスが位置する横浜は、明治以来、日本の「洋楽」受容の中心的な役割を果たしてきた場所です。中でも慶應義塾は、ワグネル・ソサイエティ(1901 年創設)、マンドリンクラブ(1910 年創設)、さらにライトミュージックソサイエティ(1946 年創設)など、大学における海外音楽文化の輸入に大きな役割を果たしてきました。今回は記念すべき第 30 回大会ということもあり、日本のポピュラー音楽の受容と学会の歴史を同

時に振り返る機会になるよう、シンポジウムなどを検討したいと考えています。

慶應義塾大学日吉キャンパスは、東京都区内の主要ターミナル駅及び横浜駅から電車で約 20 分、しかもキャンパスは駅の目の前とアクセスしやすい立地です。また、羽田空港からも比較的来やすいので、皆さんのお越しをお待ちしております。

11 月に慶應義塾大学で皆さんとお会いできるのを楽しみにしております。

【発表募集】

研究活動担当理事・井上貴子

本年度の大会での個人発表(11 月 24 日午後)とワークショップ(11 月 25 日午前)の募集をいたします。発表申込書(個人発表用とワークショップ用のそれぞれのワードファイルがあります)をダウンロードし、必要事項を記載して、下記メールアドレスまで添付ファイルにて送信してください。なお郵送等による申込を希望される方は、下記の問い合わせ先までご連絡ください。申込締切(7 月 31 日)後に研究活動委員会が申込内容を吟味したうえで、発表についてのお知らせを個別に連絡いたします。

■ 申込書類

学会ウェブサイト(<http://www.jaspm.jp/>)からダウンロードすることができます。

- ・個人発表用申込書 Jaspm30individual
- ・ワークショップ用申込書 Jasp30workshop

上記のリンクから申込書をダウンロードし、必要事項を記載してください。

■ 今大会のプログラムについて

今大会は、第一日(11月24日)午後に個人発表、第二日(11月25日)午前にワークショップ、同日の午後にシンポジウムという順でプログラムを組んでおります。個人発表をする若手会員が、同日の懇親会で参加者と交流を深められるよう意図したものです。個人発表とワークショップの申込にあたっては、日程にご留意ください。

■ 発表時間(予定)について

- ・個人発表: 30分(発表20分+質疑応答10分)
- ・ワークショップ: 3時間

■ ワークショップ企画案について

ワークショップでは、一つのテーマをめぐって多角的に提起される問題について、フロアとパネルの間で時間をかけて議論することができます。ご自分の研究フィールドの意義を知らしめる絶好の機会ですので、奮ってお申込ください。

パネルは通常、3名ほどの発表者(問題提起者)と1名の討論者から構成されます。申込時に全員の名前を記載することを原則とします。申込時に討論者についてやむを得ず未定であるという場合は、申込採択となれば、人選について研究活動委員会より相談させていただきます。なお非会員も問題提起者や討論者になることができますが、謝礼や交通費は支払われません。

■ 申込締切

個人発表・ワークショップとも、2018年7月31日(火)

※8月3日(水)を過ぎても研究活動委員会より受領の連絡がない場合には、下記の問い合わせ先にご連絡ください。

※現在非会員の方は、入会申込をされたのちに発表

申込をしてください。入会申込はリンクを参照してください。
http://www.jaspm.jp/?page_id=90

■ 大会での個人研究発表、ワークショップのニューズレターへの報告に関して

大会での個人研究発表、ワークショップは、翌年3月発行予定のニューズレターに報告を書いていただく必要があります。発表の申込をなさる方はご承知おきください。

- ・締切: 2019年2月8日(金)
- ・分量: 3000字程度・原稿の提出先: 学会ニューズレター担当(nl@jaspm.jp)
- ・報告内容:

①個人研究発表はご自身の発表の内容と質疑についてまとめてください。

②ワークショップは、問題提起者や討論者以外で報告者を決めていただき、内容と質疑についてまとめてください。報告者が決まりましたら、お手数ですが、お名前と連絡先を、学会ニューズレター担当(nl@jaspm.jp)までお知らせ下さい。

■ 個人発表・ワークショップ申込書送付先・問い合わせ先

研究活動委員会 井上貴子

メールアドレス itakako_at_ic.daito.ac.jp (_at_ をアットマークに変えてご送信ください)

電話 0493-31-1503(内線 6559) / ファクス 0493-31-1524

以上

2018年度第1回関東地区例会報告

梅田径

日時 2018年1月27日(土) 14:00開場 14:30開始

会場 ジャズ喫茶いーぐる

JR 四谷駅を降りて右手の交差点を直進。そのまま通り過ぎてしまいそうな雑居ビルの合間に、埋もれるような地下への階段があった。そこが木張りの暖かな店内で最高の音響機材が出迎える、ジャズ喫茶いーぐる。2018年の関東地区例会の会場であった。

今回は「ポピュラー音楽研究またはポピュラー音楽の過去30年のなかで、最も重要な1冊または1曲」を、各

人 10 分で説明するという企画で、かつては「新年会」と称してこんな会が開かれていたら良かった。発表者は8名ながら、紅茶やケーキが並ぶ円卓を囲んで、企画の趣旨からは想像もつかないほど多彩でコアなイベントとなった。

周東美材氏の開会挨拶に続いて、一番手は井上貴子「ファーストアルバムから 30 年、X は何を変えたのか」。X JAPAN がインディーズ時代に出したアルバム『Vanishing Vision』から「KURENAI」を流した。一時期は病気や海外での活動であまり姿を見せなかった YOSHIKI だが、最近手術を乗り越えて『VOGUE JAPAN』2017 年 10 月号に登場。現在でもシーンのトップを走り続けるクリエイターであることを見せつけた。その姿は未だに記憶に留められるべきだ、というのが主たる趣旨である。鳴り響くハードなビートに、ジャズ喫茶が揺れた。

二番手は宮入恭平「音楽と政治—ポスト 3.11 の音楽文化」。斉藤和義が大ヒット曲「ずっと好きだった」をセルフカバーした原発批判ソング「ずっとウソだった」を流した。近年、音楽における政治批判をタブーとする動向が強まるなかで、音楽のみならず人々が政治と直接向き合うことができるようになれば、との願いを込めた選曲。

続いては真田一宏「パッケージ音楽とライブ音楽」。パッケージ音楽とライブ音楽という観点から、それぞれ自らの愛する二曲を紹介してもらった。前者は英米の音楽産業の飽和によって発見されたワールドミュージックの到達点、『Le Mystère de Voix Vulgares (Vol.2)』(1988)。後者はクラブカルチャーの爆心地となったイビザ島から発信された歴史的な名盤、Energy 52『café Del Mar』(1993)を紹介。流したのは Energy 52。

四番手には鈴木孝「デジタルメディアによる音楽(受容)文化の変容」。鈴木氏は、アナログテープからサブスクリプションサービスまでの、情報科学が音楽文化をいかに変化させてきたかを極めて明瞭な技術的な変化の見取り図と共に紹介してくれた。2014 年、iTunes のプロモーションとして、U2『Songs of Innocence』が無料配信されたものの、「購入扱い」で勝手にライブラリに入ったため、多くの iTunes ユーザーを混乱させた事件は記憶に新しい。鈴木氏はこれを、音楽と音楽環境の摩擦を起こした歴史的な楽曲であるとして流された。参考資料として「デジタル技術による音楽文化の変容」(『音楽文化の創造』39、2006 冬)が紹介されたことを付記する。

五番手は山添南海子「Eminem / The Way lam (2001 年 Fuji Rock Festival- Green Stage)」。音楽フェス研究を手がける山添氏は、日本のフェス文化の問題点として人種バイアスが存在している可能性を指摘した。このセンシティブな問題において、もっとも注意すべきアーティストが Eminem だ。フェスにおけるエミネムの特殊な位置付けを考える上で、Fuji Rock Festival 最大の野外ステージである Green Stage でのパフォーマンスに注目した。その詳細が発表されることを大いに期待したい。

六番手は、梅田径「アマチュアによる音声劇とインターネット」。同人音楽の陰に隠れて目立たないが、インターネット上の創作活動として独自の地位を築いている「インターネットを使ったアマチュアの音声劇」について紹介した。同人音楽やライブ・フェスも含め、アマチュアの活動から生まれる作品群や活動をどのように保存していくべきかという問題も提起。流したのは Rit『Gift きみへ、あるいはわたしへ』(2015)より、「光を湛えて落ちる粒」。

次には、伊藤雅光「伊藤雅光 (2017)『J ポップの日本語研究 創作型人工知能のために』朝倉書店」。自著の紹介と共に、歌詞を自動生成するエンジンとそれを初音ミクで歌わせるシステムを紹介した。歌詞研究は氏の日本語研究を背景に成されており、中島みゆきの歌詞の和語と漢語の増減などは比較的近い領域を専門とする筆者には興味深い問題であった。

最後は佐藤達郎「最も重要な楽曲 Don't Lock Back In Anger (by /OASIS)について語る」。OASIS を The Beatles から ASIAN KUNG-FU GENERATION までの音楽性を繋ぎうるような不良的な、ある種の正しいロックンローラーとして評価した上で、当該曲を、アウトサイダー的な要素を捨てないままで成功した新しいイギリス国歌とすらいいうほどの楽曲であると位置づけた。あの、叙情的なギターのイントロが響いた瞬間、みんなしんみり聞き入ってしまった。

最後にはディスカッションが行われた。音楽がもつ政治性への議論や、音楽技術と文化史の問題、サブスクリプションサービスごとの特質と戦略の違い、家庭環境と音楽の聞き方の問題まで、話が大きい弾んだ。ラウンドテーブルのような自由闊達な議論ができたことで、最初はどことなく遠慮がちな雰囲気があった本会も、このディスカッションで親交が深まったように思う。

今回の企画では、PC や iPod、スマートフォンを使い、マイク越しに音源を流すことが多かったことは個人的には若干の無念さを感じなくもない。今更ながらではあるが、CD やレコードといった媒体以外での音楽聴取が当然の時代になっている事を実感した。また企画趣旨である「最も重要な 1 冊または 1 曲」という選択はあまりにも選択肢が広く、ほとんどがごく個人的な興味を抱いている対象を紹介するに留まってしまったかもしれない。もうすこし具体的なバインドがあってもよいのかもしれないが、現在において「音楽の重要度」は個人的な評価に最終的に行き着くほかないということを再確認する機会にもなった。自分の好きな音楽を、最高の機材で聴く。それをもとに議論する。そんな場が設けられたことは単純に面白かった。

最後に、最高の会場に加えて、おいしいお茶とケーキを提供してくださったジャズ喫茶イーぐる様に深く御礼申し上げます。

(梅田径)

2018 年第 1 回関西地区例会報告
栗谷佳司・太田健二・永井純一

修士論文・博士論文報告会

2018 年 3 月 29 日(木)14:00~18:00

関西大学 千里山キャンパス 第 3 学舎 A305 教室

報告者:

趙 恩(関西大学大学院社会学研究科マス・コミュニケーション学専攻博士課程前期課程)

柴台弘毅(関西大学大学院社会学研究科マス・コミュニケーション学専攻博士課程後期課程)

齋藤宗昭(関西大学大学院社会学研究科社会システムデザイン専攻博士課程後期課程)

1.「オリンピックと音楽——日本のテレビ番組における応援するテーマソングを中心に」(修士論文)

趙 恩(関西大学大学院社会学研究科マス・コミュニケーション学専攻博士課程前期課程)

報告では、日本の放送局がオリンピックの放送で使った音楽(テーマソング)について、タイアップとの関係や歌詞語彙の変遷、そしてリオデジャネイロオリンピックの中継放送の内容分析から考察された。

まず、オリンピックで使われたテーマソングを 1988 年か

ら調べて、タイアップとの関係が考察された。つづいて、テーマソングの歌詞の内容分析として、語彙の時期別の変遷を 1990 年代、2000 年代、2010 年代に分けて、「HK coder」により歌詞の主題の変化、歌詞語彙の自立語の出現頻度、二つの語彙の間の関連性の高さについての共起ネットワークを抽出して分析された。そして、リオデジャネイロオリンピックの放送を、NHK と民放各局の内容を分析シートから考察し、テーマソングやそのほかの曲が、放送ではどのように使われていたのかについて映像を交えながら報告が行われた。最後に、テーマソングが応援という心情を誘導する役割があり、キャスターやアナウンサー、選手の言動が、テーマソングから浮かび上がる情景に対応することにより選手や競技への「親近性」が生まれると結論づけた。報告のあと、歌詞の内容分析や、テレビと音楽がスポーツ競技をどのように表象するのかなどについて質疑が行われた。

本報告のような、テーマソングと番組放送における音楽の役割についての考察は、具体的な事例を元に説明されていて納得するところが多かった。報告は、オリンピックにおけるテーマソングに関するデータに基づいた実証的な研究であり、データの収集と分析は手堅いものであったと思われる。

(栗谷佳司)

2.「日本のポピュラー音楽におけるスタンダード生成過程についての研究」(博士論文)

柴台弘毅(関西大学大学院社会学研究科マス・コミュニケーション学専攻博士課程後期課程)

本報告は、日本において人びとに長く歌い聴き継がれてきた楽曲、所謂スタンダードに通じる楽曲が、どのような成育過程を経て成熟したのかを明らかにしようとする研究発表である。そこで用いられるのが、【ポピュラー】型、【ポピュラー・民俗】型、【ポピュラー・芸術】型、【ポピュラー・民俗・芸術】型という 4 つの成育過程の類型と、「曲年齢」「曲履歴」という分析概念である。テレビ局が幅広い年代の男女 2000 人以上を対象に実施した大規模なアンケート調査(1981~2016 年までの 10 事例)をもとに、選出された楽曲の特徴を分析すると、「曲年齢」が 30 歳以内のものが多く占め、30 歳を超えると少なくなることがわかる。

そこで「曲年齢」が 30 歳を超えるような 4 類型それぞれの事例として、【ポピュラー】型では TM NETWORK「Get

Wild)、「【ポピュラー・民俗】型では荻野目洋子「ダンシング・ヒーロー(Eat you up)」、「【ポピュラー・芸術】型では赤い鳥「翼をください」、「【ポピュラー・民俗・芸術】型では THE BOOM「島唄」の「曲履歴」が紹介された。

フロアからは、類型化することでこぼれ落ちてしまうものや、分類方法などに対して意見があったり、分析対象となった楽曲が選出された所以たるアンケート調査の信頼性に対する疑問が提示された。しかしながら本報告は、長く歌い聴き続けられる「スタンダード」曲の成立過程を分析する手法として有意義な示唆を与えるものであり、誰もが知っている楽曲が現れなくなりつつある昨今において、送り手側にとっても成果が期待される研究と言えるだろう。今後の研究の展開を期待したい。

(太田健二)

3.「ヴィジュアル系ロックの社会経済学」(博士論文)

齋藤宗昭(関西大学大学院社会学研究科社会システムデザイン専攻博士課程後期課程)

本報告は発表者による「ヴィジュアル系ロック」をテーマとした博士論文の要約である。「ヴィジュアル系ロック」は1990年代以降に日本のポピュラー音楽シーンで発展した音楽ジャンルである。本報告はこれを学術的研究として発展させるべく、社会経済状況との関係性から分析したものである。

報告者によれば、ヴィジュアル系は「大衆に支持されること」を求めるゆえに、1990年～2000年代を通じてさまざまなトピックと結びつき、日本社会の動向を反映した。具体例をあげれば、経済停滞、新自由主義、グローバリゼーション、ヤンキー文化、右傾化、クールジャパンなどである。

質疑応答では、「それはヴィジュアル系に固有の問題なのか」と、他のジャンルとの関係性についての議論がなされた。包括的にヴィジュアル系文化を論じる試みであるため、全体として抽象度が高く、個々の議論あるいはマクロな社会理論(社会経済学)とミクロな事例(ヴィジュアル系)の結びつきに関する説明が今回の報告では不足していたように思われた。個別には興味深い論点が多く含まれているので、今後の研究の発展に期待したい。

(永井純一)

2018年第2回関東地区例会報告

周東美材・宇野友子・北村心平・西山颯・石橋鼓太郎

卒業論文・修士論文報告会

日時:2018年3月21日(水・祝) 14:00～17:00

会場:大東文化大学大東文化会館 3階 K301

報告者:

宇野友子(フェリス女学院大学音楽研究科研究生)

北村心平(武蔵大学大学院人文科学研究科博士前期課程)

西山颯(横浜国立大学大学院教育学研究科修士課程)

石橋鼓太郎(東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科修士課程)

2018年度第2回関東地区例会は、卒業論文・修士論文報告会として開催された。昨年度の第2回関東地区例会の試みを継続し、今回も学会ホームページで4名の発表者を募った。当日は生憎の大雪であったが、活発な議論が展開され、当初の予定時間を大幅に超過する充実した会となった。以下では、研究概要、質疑応答、今後の課題等に関して発表者自身が報告を行う。

(周東美材)

1.「ビリー・ジョエルの音楽——楽曲様式の変遷」

宇野友子(フェリス女学院大学音楽研究科研究生)

本研究は、アメリカのシンガー・ソング・ライターであるビリー・ジョエルが20年以上に渡りヒット曲を生み出した手法を探るべく楽曲分析を試みたものである。

1971年から1993年までの12アルバム全116曲の形式分析を行い、ポピュラー音楽によく見られるAAA系とAABA系に分類した。その結果、全体では6:4の割合でやや複雑なAABA系の優位が見られ、70-80年代前半は全体と同比率を示したが、80年代後半-93年では5:5の比率であった。

また、本論ではあえてやや単純なAAA系の形式においても、時流の影響がどのような形で現れるかに着目し、83年と93年の楽曲からテンポ・時間の近い2曲を選び比較分析した。結果、同じAAA系においても83年の曲は93年の曲に比し内部に複雑性を認めた。

今回の研究により、ビリー・ジョエルに影響を与えた音楽様式としてプログレッシブ・ロック(以下プログレ)様式からニュー・ウェイブ様式への変遷が見られた。70-80年代

前半はプログレ様式の特徴である複雑志向性が推察され、80年代後半-90年代にかけては複合的な内部構造を持ちながらも単純志向性のニュー・ウェイブ様式の影響が見られた。

質疑応答では、ライブなどでは音楽形式の変化が見られるのか、また比較対象曲の選定についての質問があった。前者では、今回の研究対象はスタジオ盤を対象としたことを説明し、後者では、同じAAA系の形式を選定の基準にしたことを述べた。またプログレ様式の複雑性についての疑問と、時流としてのプログレやニュー・ウェイブの影響に時間のズレを感じるのと指摘があった。プログレは小形式内の複合性が複雑性に繋がることを説明し、時流の影響については聴衆がプログレやニュー・ウェイブを受け入れた素地ができていたことを確信して曲作りをしたと思われることを述べた。今後、さらにプログレとの関係の検証、他のアーティストの比較検討が必要との指摘もなされた。

(宇野友子)

2. 「脱領土化をめぐるポピュラー音楽——1990年代—2000年代を中心に・日本のクラブカルチャーを通して」 北村心平(武蔵大学大学院人文科学研究科博士前期課程)

日本のクラブカルチャーに関する先行研究には、グローバル化に関する記述に踏み込んだものは数少ない。今回の報告の目的は、クラブカルチャーがグローバル化によって国境を越えた関係の中で醸成された特徴的な文化だとみなし、今日の音楽文化やサブカルチャーの一側面について考察を試みた。特にアンダーグラウンドなレイヴの位置づけについて述べた。

クラブカルチャーはその歴史的な歩みや、文化様式を取り出してみようと、多様な国籍の人々が集い、楽しみ方を参加者に任せる「寛容性」と、客層を制限する「排他性」を孕んでいる。日本のクラブカルチャーについては、もともとは業界人の閉じた文化として始まったものの、90年代に入るとテクノ・ムーブメントといった巨大資本やメディアが積極的にクラブカルチャーと関わる中で広く知られるようになっていった側面がある。そうして増加したリスナーの中には自ら表現者として草の根的に活動を始めるようになった者もいる。一方で、同じく90年代にレイヴという、ドラッグを楽しみながら山奥のような屋外で開催されるイベントについては「トラベラー」と呼ばれる、国内外を旅し

ながら生活する人たちが深く関わる中で日本に取り入れられていく。彼らはロコミのような閉じた情報回路の中でイベント情報をやり取りし、国家という枠組みを超えた中で活動を繰り返していた。このように国内外に渡りいくつかの活動が折り重なる中で日本のクラブカルチャーは花開いていく。

ただしクラブカルチャーやレイヴは2000年代に入ると勢いを失っていく。日本のクラブカルチャーは商業化していく側面と、アンダーグラウンドを貫こうとする側面がみられるようになる。特に後者については国内で活動する人々の関与というよりは、外国人のDJにゲスト出演してもらうことで維持されていた。国内での資源を生かさないうまま、クラブカルチャーそれぞれの目的に従って分化していったのである。

フロアからは、クラブカルチャーと音楽フェスティバルとの接続についての具体的な事例についての質問や、「トラベラー」と呼ばれる人たちの宗教的な立場についての質問を受けた。前者の質問については、フェスティバルはレイヴのようなアンダーグラウンドな意匠を引き受けつつ、資本主義に包摂させる形式であると述べた。後者については、レイヴは法律や資本主義と距離を置こうとする文化であったため、宗教的な要素は重要なポイントだったと思うが、自身の力不足で深く掘り下げることはできなかった。この部分を詳しくすればより良い研究になったはずとの意見を頂いた。

(北村心平)

3. 「ソーシャルアートとしての音楽の可能性——音楽実践への参加過程と参加者の関係性の分析を通して」 西山颯(横浜国立大学大学院教育学研究科修士課程)

本報告は、様々な社会問題の発見・解決と結びついた実践を「ソーシャルアート」と総称し、聴衆が音楽実践の生成過程へ参加する過程と、社会問題の解決との結びつきについて考察するものである。まず、トマス・トゥリノの「参与型」音楽の概念などを援用しつつ、先行研究から導き出される仮説を提示したのち、エスノグラフィックな手法で行ったフィールドワークの成果を分析した。

フィールドワークから、聴衆がアーティストの呼びかけや手拍子などの参加行動によって能動的な参加者へ変容し、参加の度合いを次第に強めていく構造を示した。また、このプロセスは、音楽実践が行われるセクシュアル・

マイノリティの啓発イベントへの参加も強め、既存の関係性の脱構築を表象する。さらに、参加型音楽イベント「アンサンブルズ東京」を例に、実践の場で目指される理念などの「理想的枠組み」と、参加者とアーティストの協働を促進する「参加の枠組み」の2つの観点を実践の適切さを見定めるツールとして提案した。

本報告に対して、設定した研究の対象に関する疑問が指摘された。排他性と寛容性を含み、ともに音楽に参加する「場」を形作る社会集団は日常的にも多数存在しており、セクシュアル・マイノリティを扱ったイベントと「アンサンブルズ東京」では、扱う社会問題の規模が全く異なる。はっきりとした政治的思想を表す海外の実践と比べ、日本の実践は緩やかに含みを持たせる程度で留めていることが多いものの、それらを総称した「ソーシャルアート」の定義についても、検討の余地があろう。また、音楽実践と社会集団の参加過程が結びつく根拠の不足も指摘された。社会的な関係性の脱構築が認められるならば、旧来の関係性は一切機能しない状態になる。しかし実際には、「違いを確認しあう場」になっている可能性もあり、今後の検証が必要との指摘もなされた。

(西山颯)

4. 「共創的音楽実践における参加の様態に関する研究——「野村誠 千住だじゃれ音楽祭」の分析から」

石橋鼓太郎(東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科修士課程)

本報告は、芸術祭やアートプロジェクトなどの文脈で近年増えつつある、多様な背景を持った人々が共に音楽を創造する「共創的音楽実践」を、「参加」という視点から分析したものである。

まず理論的な枠組みとして、音楽学や民族音楽学、相互行為論、状況の学習論などを参照しつつ、音楽への「参加」にあたって事前に文化的に決められた方法により獲得されるコミュニティへの同一化や一体感を重視する従来のアプローチから脱し、行為や出来事の偶発性によって生じる力学に焦点を当てる研究アプローチが示された。

研究事例としては、足立区千住地域で展開されているアートプロジェクト「野村誠 千住だじゃれ音楽祭」を取り上げ、活動開始から現在に至るまでのプロジェクト構造および参加者の役割の変化や、近年の活動におけるコミュニティの構成、セッションやワークショップの場面における

相互行為などを分析した。その結果、他者の音との偶発的な重なり合いを拾い上げて即興演奏を展開していく参加者の美的態度によって、場の枠組みが緩やかに変容し、より広い参加が誘発されていることを示した。

質疑応答では、事例の企画制作に関わっている発作者の特殊なポジショナリティや、事例を取り巻く社会的・政治的文脈に伴う実践および研究のイデオロギー性について、より反省的・批判的な分析をおこなう必要があったのではないか、という意見が目立った。また、本事例に見られる作曲家の野村誠を中心とした音楽実践の特殊性と、それを一般化することの難しさについての指摘もなされた。一方で、音楽を介した相互行為に焦点を当て、音が重なり合うことで言葉を交わさずに音楽が立ち上がる過程を分析した本研究のアプローチに新たな可能性を見出せるのではないか、というコメントもあった。

今後は、音楽実践のミクロな場面に見られる関係性の分析に引き続き焦点を当てつつ、それがよりマクロな社会的状況とどのように関わっているかという視点も取り入れながら、研究を続けていきたい。

(石橋鼓太郎)

◆information◆

事務局より

1. 原稿募集

JASPM ニュースレターは、会員からの自発的な寄稿を中心に構成しています。何らかのかたちでJASPMの活動やポピュラー音楽研究にかかわるものであれば歓迎します。字数の厳密な規定はありませんが、紙面の制約から1,000字から3,000字程度が望ましいです。ただし、原稿料はありません。

また、自著論文・著書など、会員の皆さんのアウトプットについてもお知らせ下さい。紙面で随時告知します。こちらはポピュラー音楽研究に限定しません。いずれも編集担当の判断で適当に削ることがありますのであらかじめご承知おきください。

ニュースレターは学会ウェブサイト掲載のPDFで年3回(2月、5月、11月)の刊行、紙面で年1回(8月)の刊行となっております。住所変更等、会員の動静に関する情報は、紙面で発行される号にのみ掲載され、インター

ネット上で公開されることはありません。PDFで発行されたニュースレターはJASPMウェブサイトのニュースレターのページに掲載されています。

(URL:<http://www.jaspm.jp/newsletter.html>)

8月の紙媒体での発行号については、会員の動静に関する個人情報を削除したものを、他の号と同様にPDFにより掲載しております。次号(117号)は2018年8月発行予定です。原稿締切は2018年7月20日とします。また次々号(118号)は2018年11月発行予定です。原稿締切は2018年10月20日とします。

投稿原稿の送り先はJASPM広報ニュースレター担当(nl@jaspm.jp)ですので、お間違えなきようご注意ください。ニュースレター編集に関する連絡も上記にお願いいたします。

2. 住所・所属の変更届と退会について

住所や所属、およびメールアドレスに変更があった場合、また退会届は、できるだけ早く学会事務局(jimu@jaspm.jp)まで郵便またはEメールでお知らせください。 会員情報変更届はJASPMウェブサイトよりダウンロードできます。ご連絡がない場合、学会誌や郵便物がお手元に届かないなどのご迷惑をおかけするおそれがございます。例会などのお知らせはEメールにて行なっております。メールアドレスの変更についても、速やかなご連絡を事務局までお願いいたします。

3. 会費請求と会員のメールアドレス問い合わせについて

2018年3月に、2018年度の会費請求書類を、学会誌Vol.21(2017)と一緒に会員の皆様のお手元にお届けしました。学会誌は2017年度の会費納入者にお送りしておりますので、学会誌が同封されていない場合は、速やかに会費を納入いただきますようお願いいたします(会費納入後速やかに会誌を送付いたします)。

なお、会員の皆様には、電子メールにて随時、学会からのお知らせ「JASPM メールニュース」をお送りしておりますが、最近、メールが不着となる会員の方が増えております。そのため、会費請求書類とあわせて、会員の皆様に最新のメールアドレスの問い合わせに関する書類を同封しております。メールニュースが届いておられない会員の皆様につきましては、ご留意の上ご回答いただきましたら

幸いです。

JASPM NEWSLETTER 第116号

(vol. 30 no.2)

2018年6月25日発行

発行：日本ポピュラー音楽学会 (JASPM)

会長 小川博司

理事 青木深・井手口彰典・井上貴子・大和田俊之・川本聡胤・谷口文和・増田聡・安田昌弘・山崎晶

学会事務局：

〒606-8588

京都市左京区岩倉木野町137

京都精華大学

安田昌弘研究室内

jimu@jaspm.jp (事務一般)

nl@jaspm.jp (ニュースレター関係)

<http://www.jaspm.jp>

振替：

00160-3-412057 日本ポピュラー音楽学会

編集：平石貴士